

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
いわせ さだじ 岩瀬 定司	男 性	19 歳	名古屋市 (渥美郡福江町)

「小作の子が同じ農民を苦しめて」

「東三河郷開拓団からの手紙」より (部分修正)

私は渥美町の農家の次男です。昭和17年、16歳で東三河郷開拓団に参加しました。この前の年の12月8日に、日本はアメリカと戦争に入っていました。私の小学校のクラス60名のうち進学したのは3人だけで、地主の子と網元（漁船の所有者）の子でした。長男でも豊川や名古屋の軍需工場に働きに行きました。また、二男三男で海軍などを志願した人もいました。私の生家は小作で、畑と水田3000㎡（約3反）ほど耕作していました。このうち水田2000㎡は借地でした。借料はお金ではなく米で納めていました。1000㎡あたり米120kg（2俵）を納めていました。1000㎡あたりの取れ高は約6俵なので3分の1が借料になります。当時、私の生家の水田は水に恵まれず頼みは雨でした。晴天が続けば田の端に掘ってある井戸から地下水をハネツルベでくみ上げ、田に入れて稲を作ったのです。夏休みは子どもまで水くみに使われたものです。努力して実らせても3分の1は借料でした。学校を卒業する年ごろ、この切ない思いを知りました。

よし、広い大地の満州へ自分の土地で大規模農業を打ち立てよう、その夢を見て開拓団へ入ったのです。入団したら普通、出身地別の部落へ入り、営農を始めたのですが、私はいっしょに入団した若者11名は訓練生として本部で約1カ年教わることになり、本部の建物で生活しました。常に指導員に付き添われての行動でした。主な仕事に小学校の校舎建築に用いるレンガ作りの手伝いがありました。2年後このレンガで立派な堂々とした校舎が団員総出の工事でできあがりました。この校舎は現在も倉庫として使われているとか、私たち開拓団の残した唯一のものです。レンガ作りは中国人の職人さん、私たちは土運びや水運びの手助けでした。レンガを作るには焼き上げる炉が必要で、これも職人さんたちの手で築かれました。大きな炉です。一度に大きいトラック1台分ぐらいのレンガが焼かれました。炉の壁



当時の国民学校前で (1990年撮影) 夏目幾代氏提供

は厚く、外観は家ほどあるものでした。校舎の壁の厚さも60cmぐらいのもので
すから、大量のレンガが必要だったのです。

本部からレンガの炉まで2kmか3kmの道のり、これを毎日歩いて通ったのです
が、この道中に中国人の部落が点在していました。土壁の屋根にも土を乗せた家
で、学校もあり寺もありました。三合屯という部落です。開拓団本部の建物は、
もともと中国人の地主のものでした。東三河郷開拓団がこの地に入植するために、
土地とともに拓殖公社など役所が強制的に買い上げたのです。炉の近くにも元中
国人地主の大きな家があり、村がありました。地主たちは土地を安く買い上げら
れましたが、替え地を持ったりしてまだ良い方で、土地を持たなかった中国人た
ちは、取り残されたように開拓団地内に住んでいたのです。開拓団の全面積に対
して、元中国人地主の持っていた土地は何パーセントにもなりません。占領軍的
な土地の明け渡しは、彼らにしてみればとても悲しいことだったのです。

東三河郷開拓団が入植した土地は湿地帯が多く、将来的には水田に適している
とされてきました。しかし、私が入団した2年前の昭和15年と16年と2年続
けて水害に遭い、収穫できずにとっても苦しんでいる最中でした。ここを生き延び
るには、隣（といっても10kmも先）の中国人の作っている良い土地が是非とも
必要と拓殖公社や県の役所などが動き、この時測量の手助けに駆り出されました。
つまり、小作の子が満州へ出かけ、同じ農民を苦しめてきたのです。

平成2年10月31日

(記録者 森 順一郎さん)